新たなる〈地中海〉: (I-II)「十字架を担う ということは、キリ ストとひとつになる こと |

神との親子関係の自覚は、私たちの人生のある局面に特別な仕方で結びついています。 その局面とは、悩み苦しむとき、つまりわたしたちがイエスの十字架に与るときです。

神との親子関係を通じて理解された 神の父性は、まさしく新たな〈地中 海〉といえるでしょう、私たちの前 には広大なパノラマが開け、わたし たちの生活全体を形づくるように、 わたしたちを神のうちに、神の前に 置くのです。つまり、こう言うこと ができるでしょう、「神との父子関 係は、固有の行ないを伴った特定の 徳のことではなく、諸々の徳の主体 に備わった永続的な状態です。ある 特定の徳の行ないをもって神の子と して働くというのではなく、すべて の徳もすべての活動も神の子として 実行することができ、またそうすべ きであるということになります| [1]。ですからわたしたちは、人生の 各瞬間を「神の子供たちの栄光に輝 く自由| (ローマ8・21) をもって 生きることができるのです。

とはいえ、神との親子関係の自覚は、私たちの人生のある局面に特別な仕方で結びついています。その局

面とは、悩み苦しむとき、つまりわ たしたちがイエスの十字架に与ると きです。そのことは、マルコ福音書 にあるように、異邦人がイエスを神 の子と認めたのはまさにその死を目 の当たりにしたときだったというと ころに、鮮やかに示されています (マルコ15・39参照)。聖ヨハネも また、十字架こそが神の栄光の輝く 場であると理解していました(ヨハ ネ12・23-24参照)。そして聖パウ 口も、栄光への道は、「ユダヤ人に はつまずかせるもの、異邦人には愚 かなもの | (1コリント1・23)、 すなわち十字架につけられたキリス トと一致するところにある、と知る に至ったのです。

同様に、聖ホセマリアの人生においても、神との親子関係の自覚は十字架の経験を通じて悟らされたのでした。1930年代の初めの頃でした。伝記作家たちによれば、若き司祭ホセマリアは、母や姉・弟が経済的に困

窮し厳しい生活を送っているのを見て苦しんでいました。マドリッドでまだ不安定な地位しか得られずにいたことでも苦しんでいましたし、さらにはスペインにおいて教会が困難な状況のもとにあったことにも苦しんでいました。そうした中で、彼はこう書いています。

「1931年頃、主がわたしをあのよう に打たれたとき、わたしはその意味 を理解できませんでした。そして突 然、あのひどい苦しみのさなかに、 言葉が聞こえたのです――お前はわ たしの子(詩編2・7)、お前はキリ スト。わたしにはこう繰り返すこと しかできませんでした――アッバ、 父よ! アッバ、父よ! アッバ! アッバ! アッバ! (…)。主よ、あ なたはわたしに理解させてくださっ たのです、十字架を担うということ は、幸福を、喜びを見出すことだ と。その理由は一一いまわたしには かつてないほどはっきり見えます

一一その理由はこうです。十字架を担うということはキリストと一つになること、キリストとなること、つまり神の子となるということなのです」[2]。

この経験は聖ホセマリアの霊魂に深 く刻まれました。それは、神との親 子関係の発見だっただけでなく、キ リストの犠牲との緊密な一致でも あったのです。それは逆説的なこと でもあります。つまり、神の子―― それも幼子――というわたしたちの 身分は、十字架とひとつになってい るということです。この逆説は、そ れからだいぶ後に書かれた『十字架 の道行』の中の次のような言葉にも 示されています。「後悔する子供が 父親のがっしりとした腕の中に身を 投げるように、イエズスのくびきに つかまろう | [3]。 もしもわたしたち が自分は神の子だと知るなら、十字 架はわたしたちと神との親子関係の 確かなしるし、つまり神はわたした

ちと共におられるということの最大 の保証となるでしょう。

一見すると狂気の沙汰のように思えるかも知れませんが、十字は、常さした。 おいまである。者にとり、であり、おに従るしてあり、かたしるしてのする。 大にのしているが、かたしるは、でありないです。 大に接めているが、かたしるは、常にはのです。 では、常に十らない、ははいるでは、常にもがいるです。 は、はいるです。 とればいるがを発見しているのです。

[1] フェルナンド・オカリス/イグ ナシオ・デ・セラヤ『神の子として 生きる』 [新田壮一郎訳、精道教育 促進協会、1999年、41ページ]。 [2] San Josemaría Escrivá, Apuntes de una meditación, 28-IV-1963, en E. Burkhart, J. López, Vida cotidiana y santidad en la enseñanza de San Josemaría, vol. 2, 37-38.

[3] 聖ホセマリア『十字架の道行き』 第7留 [精道教育促進協会スタッフ 訳、精道教育促進協会、1981年、58 ページ]。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/juujika-ninau/ (2025/12/12)